

離婚者に手を差し伸べよう

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

離婚者に手を差し伸べよう

2014年と2015年と開かれたヴァチカンのシノド定例会議、臨時会議では「家族」の問題が主題で、すでに総括もなされている。しかし、この機に及んで、法王の希望が明瞭に付記されることになった。

今までは、結婚したが離婚して再婚した者は、教えの基準に則って、教会の聖餐式に参加できないことになっていた。ただ近年、こうした人たちが急増してきたので、教会の礼拝や儀式に参列する人が激減し、教会は閑散としている。しかし、法王によると、聖餐式には誰でも参加できるものであって、これは福音書の論理に合わない。法王の主張は、新しい生活を始めた離婚者のみに言っているのではなく、どんな状況の中にもある全ての人に言っている。2014年と2015年の会議録は360ページに及び、9章、325節に分かれている。その中で特に「家」「仕事」「子供の教育」「危機」、さらには悪としてではなく「神の贈り物」として「性」が述べられている。「聖体拝礼」というのは、完全なる人への「報奨金」ではなく、弱い人に対する純度の高い「薬」であり「食物」である。

さらに法王の強調点を記そう。

- ・規則というのは石ではない。教えは一つだが、解釈は時により変動する。
- ・家族に関する教会の教えを再認識し肯定すること。
- ・結婚して、離婚して、再婚した人にも手をいっばいに広げ歓迎すること。
- ・女性は大きく目を開き、自尊心をもち、女性の役割を果たすことが大事である。
- ・性の同等化はありえない。しかし、同性愛の人も尊敬されねばならない。
- ・第二ヴァチカン公会議の頃には、未だはつきりしていなかったために、性に関しては論議されなかったが、性教育は大事だし、避妊も大事である。
- ・エロスや夫婦愛は創造物への神からの贈り物である。
- ・シングルマザーの子供には罪はない。その子供には洗礼をほどこすべきだ。教会は人に近づき、その人の傷を癒すべきだ。聖書を融通の利かない石のようにすべきではない。

この法王の声明に各教区は「苦しんでいる者をたすけることは正当だ」と、賛意を表明している。家庭評議会議長官ヴィンチェンツォ・パリア大司教は「我々は人々の傷を癒さねばならない。裁判所のような行動はしない」と述べている。

難民をレスボス島に押し込んだことに抗議

昨年从今年にかけて、シリアのIS勢力の台頭にも影響されて、シリアの内戦は泥沼の様相を呈している。その中で多くの人々は家を失い、混沌とした社会に別れを告げるべく自由と平等を求め、新天地ヨーロッパへの移住を目指す。彼らにとっては巨額な経費を払って大きなゴムボートに乗り込む。あるいは陸地づたいにシリアからトルコへ、トルコからギリシャへと渡り、そこからバルカン諸国へと入り、最終的にはドイツに安住の地を求めようとしている。昨年の初めの頃はバルカン半島の諸国は、それらの難民を入国させ、自分の国を通過させ、次の国に移動することに反対する態度はほとんどなかった。しかし昨今、難民の数が多くなり、各国とも難民に援助の手を差し伸べることが難しくなり、国境閉鎖という事態が次から次へと起きている。つい最近ではオーストラリアはブレンネロでイタリアとの国境を閉鎖し、難民を受けつけないようになった。

そこでEU議会は、難民は自国へ帰るべきだと決定し、トルコと協定を結んだ。難民をトルコに戻し、そこからギリシャのレスボス島に收容し、そこでシリアの内戦状態を注視して、帰国できるまで待機させることになった。

以上のような出来事に叛意を翻したのがローマ法王だ。このEUの対処は、非人道的であって許し難いということである。

レスボス島に押し込まれた難民を慰問するために、法王は4月16日ローマからレスボス島へ出向いた。そこで難民たちに会い、話し合い、励まし、帰りにはイスラム教徒の3家族12名を自分の飛行機に乗せローマに連れて来て、聖エジディオ共同体に彼らの世話をするように申し付けた。法王は難民を受け入れ、世話をしているレスボの人たちを誉め称えていた。キリスト教徒の家族もいたがイタリア入国のための書類が揃っていなかったため、イタリア入国の条件が整っていたのは偶然にもイスラム教徒の家族だけだった。難民の選択には特別な配慮はなかった。人間は神の子で問題は何かないのだ。法王は「家族は社会の基盤だ。今全世界は危機の中にある。若者は結婚しようとしないうし、出生率は大幅に低下している。これは現世界の大問題である」と述べている。

レスボス島に住まいする老女に関して記そう。

その老女は85歳。文字の読み書きはできないが、今年のノーベル平和賞の候補者の一人だ。名前はマリッサ・マウラビデュという。身体を暖めるための薪をたくストーブがあり、いつも同じエプロンを腰に巻いている。もちろんテレビもラジオもない。しかし、すり寄って来る猫が沢山いる。彼女の家の扉は二つの世界に向かって開いている。左がギリシャ側で、正面はトルコ側を向いている。

島には東から西から難民たちが押し寄せて来る。それを連日見続けるマウラビデュはアラビア語もクルド語もウルデュ語も話せないために、意思の疎通はできないが、ジェスチャーでお互いに分り合えると言っている。彼女は同じレスボの90歳の従姉妹のエフスタティア・マウラビデュと、友達で84歳のカムヴィジとともに、難民の赤ん坊にミルクを与えている。彼女の心には救いを求める子供、泣き叫ぶ子供、びしょぬれの子供、寒さに震える子供たちの映像がびっしりとつまっている。

性的小児愛症者への追求・対応は不十分

近年ヴァチカン内部では、聖職者たちによる性的小児愛症の例が数多く語られていた。中には地位を剥奪されたり、追放された聖職者もいる。これらの処分は、その問題は解決されたと思われていたが、3月の初めオーストラリアの性的小児愛症の被害者たちがローマにやって来て、ホテル・クイリナーレの前で抗議活動をした。それによると世界のあちこちで聖職者による性的小児愛症の被害者は多数に上っていて、成人に達しても心的に解放されていない被害者が多い。オーストラリアの例をとれば、自殺した者、交通事故に遭い身体不自由になっている者、アルコール依存症になった者もいる。「私の家族は教会によって壊された」という者もいる。これらの非難に対応したのが、ヴァチカンの「財務事務局」の長官ジョージ・ペル枢機卿だった。枢機卿はオーストラリア人で1970年代から80年代にかけて、性的小児愛症だったオーストラリアの聖職者を匿ったり、勤務地の変更などをしたので、交渉に20時間以上費やしても抗議の人たちの怒りは収まらなかった。しかし、そのペル枢機卿も今は74歳、来年には定年となり、すべての役職から離れるため、抗議書の糾弾の矛先も変わって来るのだ。